

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第六十回）

「蘆城」

・「蘆城」は「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府（現・福岡県太宰府市）から丘陵を越えて東南へ約4 km程の地にある筑前国御笠郡阿志岐（現・福岡県筑紫野市阿志岐・吉木）の地域が想定されている。

・この地域は福岡県の中央部からやや西部に位置しており、古代、東部に向かい豊前（現・福岡県東南部及び大分県北部に属する。）を通過して瀬戸内海沿岸に至る古代の官道「田河道」たがわじに臨み、公務往来する者のために馬を用意し、宿を設けた駅家うまやで万葉集によつてのみ知られる「蘆城の駅家」あしき うまやがあった。

・駅家跡は昭和五十三（1978）年に発掘調査で筑紫野市大字吉木の水田下から奈良時代〜平安時代のもつとされる建物跡が発掘された。この建物群が「萬葉集」に詠われた蘆城の駅家跡と推定されている。

・この蘆城の駅家は、大宰府に近く、また、山々に囲まれ、平野部を蘆城川が流れるなど景色が良い地であるため、しばしば大宰府官人達の憩いの場として宴が開かれていたようである。万葉集には宴を催した際に詠んだ次の歌が収録されている。

・この歌に詠まれている『蘆城の川』は今、この地を流れる宝満川ほうまんかわであり、『蘆城の野』は宝満川流域の平野といわれる。

おみなえし

あきはぎまじ

あしき

の

けふ

1) 女郎花 秋萩交る 蘆城の野 今日を

はじ

よろづよ

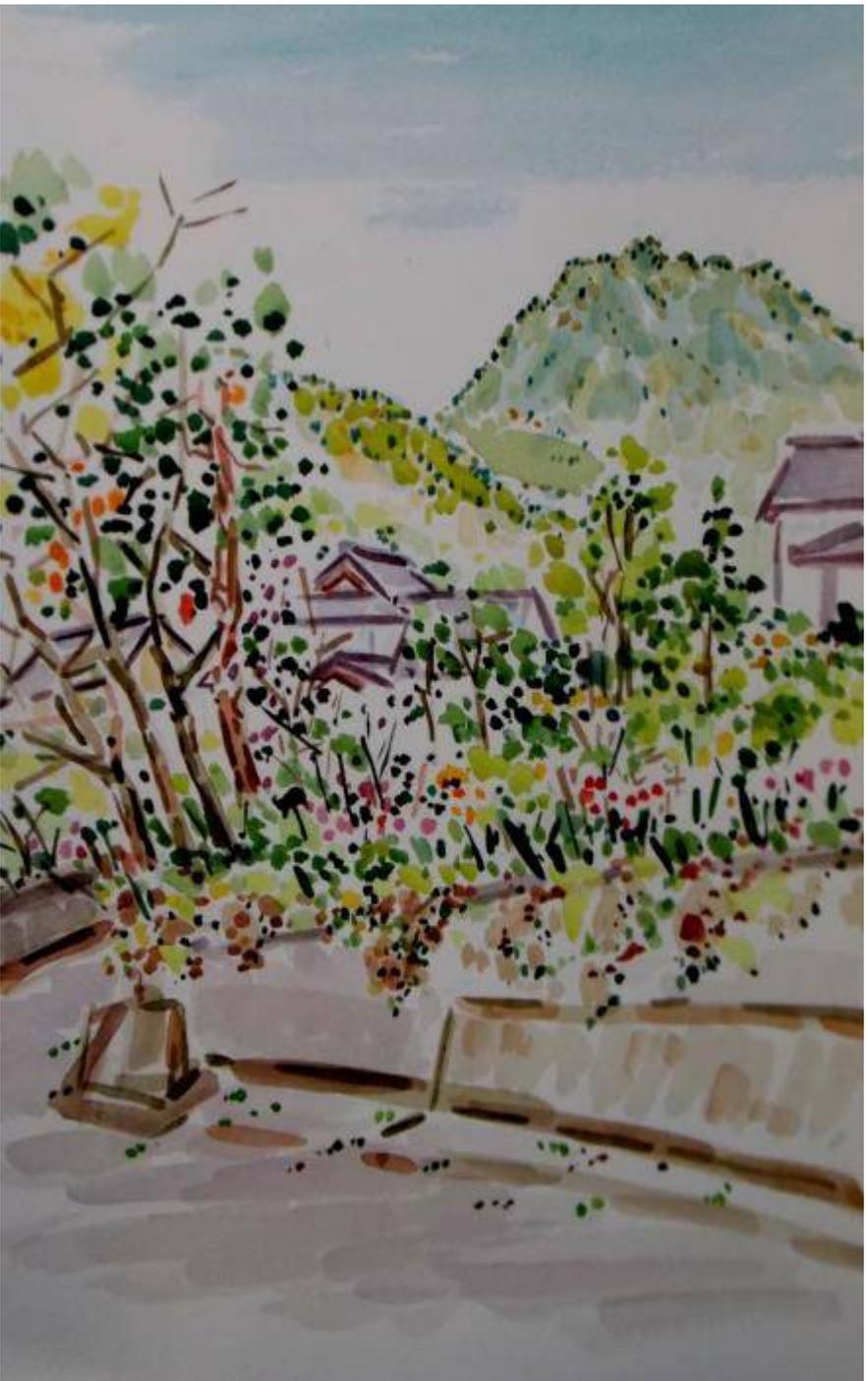
み

始めて 万代に見む

巻八―1530 作者…未詳

(解説) おみなえしと秋萩とが入り交って咲いている蘆城の野よ、この野を今日を始めてとしていついつまでも見よう。

(写生地1) 筑紫野市の北東端にある大字吉木を通る県道吉木―関屋線沿いの吉木小学校から約200メートル東へ入った市道脇の水田下から奈良く平安時代のもので推定される掘立柱建物跡が発掘された。この建物跡が蘆城駅跡と推定されているが、その近くにある東吉木集落に秋の花々が咲き誇る秋風景と背景に大宰府の東にある宝満山を描く。(杏 花)



2)

玉櫛笥

蘆城の川を

今日見ては

たまくしげ

あしき

かは

けふみ

よろづよ

わす

万代までになんぞ忘れえぬやも

卷八―1531 作者…未詳

(解説) 蘆城の川、この川を今日見たからには、いついつまでも忘れられようか。

○この二首の作者は未詳となっているが歌の内容から大宰府に新たに赴任した官人の歓迎を兼ねた秋の宴で「今日を始めて」(一五三〇)、「今日見ては」(一五三二)などの表現から二首とも新任者が詠んだ歌だと見られる。

(写生地②) 大宰府の東にある宝満山に端を発し、南流して蘆城の駅家跡と推定される建物跡が発掘された筑紫市吉木付近を通り、筑後川に流れ込む古代の蘆城の川といわれる今の「宝満川」を描く。背景は宝満山。(杏花)

